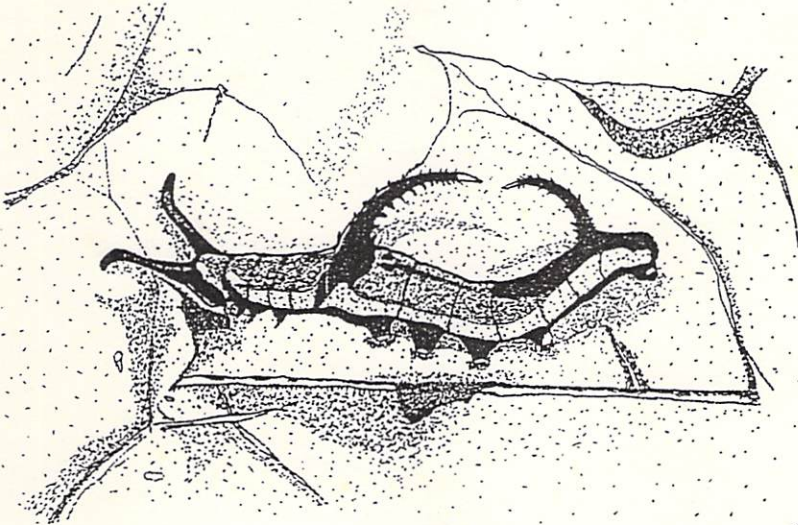


HITOTSUBATAGO NO. 8

ヒトツバタゴ



Final instar larva of *Cyrestis thyodamas* BOISDUVAL



対馬生物研究会

February 1991

イシガケチョウの飼育記録

杉 憲

- 9月22日 ・西漕手湾奥で、食樹「イヌビワ」に産卵 ——13:15
する母蝶を発見。天候晴れ無風状態。
- ・樹上で産卵と日光浴を繰り返しながら4 ——13:35
～5卵を産卵。その後採集を試みるが取
り逃がし対岸へ。
- ・産卵樹を捜し新芽葉上に生み付けられた ——13:45
12卵を採卵。

*12卵中1卵はアカダニにより吸汁されているところ
だった。

*卵はすべてが食樹「イヌビワ」の新芽葉裏面に1個ず
つ、4卵が2個ずつ生み付けられていた。

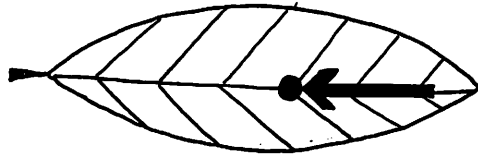
○9月23日 ・変化なし。

- 9月24日 ・朝確認時、汚黄色に変化。アカダニによ —— 7:00
る被吸汁卵は黒変してしまっていた。
- ・11卵の孵化確認。—————17:15

○9月25日 ・変化なし。

- 9月26日 ・朝確認時、3頭が脱皮、2令幼虫に変化。—— 7:00
・すべて脱皮、2令幼虫に変化するを確認。——17:15

*幼虫は次図●印の位置にかみあとを作り矢印の向きに
静止するものが多い。



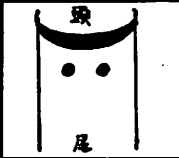


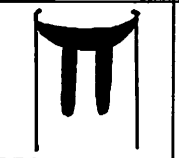
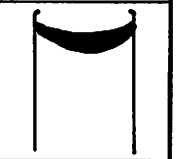
- 9月27日
- ・朝確認時、変化なし。———— 7:00
 - ・2頭が脱皮、3令幼虫に変化するを確認。——17:30
 - ・さらに1頭が脱皮、3令幼虫に変化。————21:10
- 9月28日
- ・朝確認時、3令幼虫9頭、2令幼虫2頭。—— 7:10
 - ・3令幼虫のうち1頭は頭部突起異常。
 - ・さらに1頭3令幼虫に脱皮。———— 8:25
 - ・最後の1頭の3令幼虫脱皮を確認。————10:35

* 幼虫は最後尾の吸盤2個を持ち上げる姿勢で休止。



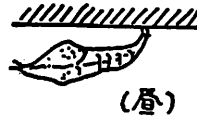
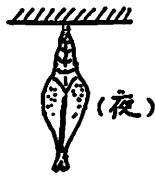
- ・1頭が脱皮、4令幼虫に変化するを確認。——22:20
- 9月29日
- ・朝確認時、4令幼虫5頭、3令幼虫6頭。—— 7:00
 - ・昼確認時、4令幼虫9頭、3令幼虫2頭。——12:45
 - ・夕確認時、4令幼虫10頭、3令幼虫1頭。——18:15
 - ・夜確認時、すべて4令幼虫に脱皮確認。 ——21:40
- 9月30日
- ・朝確認時、変化なし。———— 6:40
 - ・夕確認時、終令幼虫4頭、4令幼虫7頭。——16:35
- 10月01日
- ・朝確認時、終令幼虫9頭、4令幼虫2頭。—— 7:45
 - ・さらに1頭終令幼虫に脱皮。———— 9:40
 - ・すべて終令幼虫に脱皮。————18:20

*終令幼虫の背面紋様の変化は、下記のようにであった。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
円紋	小楕円	長楕円	接触楕円	無紋
2頭	3頭	3頭	2頭	1頭
				

- 10月02日 ・朝確認時、変化なし。———— 7:05
 ・夕確認時、変化なし。———— 17:00
- 10月03日 ・朝確認時、前蛹2頭。———— 7:10
 ・夕確認時、2頭蛹化。———— 17:00
 ・さらに、3頭前蛹。———— 20:00
 ・さらに、4頭前蛹。———— 22:00
- 10月04日 ・朝確認時、2頭蛹化。———— 7:10
 ・夕確認時、7頭蛹化。———— 17:00
 ・さらに、1頭前蛹。———— 19:00
 ・さらに、1頭前蛹。———— 20:30
- 10月05日 ・朝確認時、変化なし。———— 7:05
 ・夕確認時、変化なし。———— 17:00
- 10月06日 ・朝確認時、2頭蛹化。———— 7:45

*蛹の習性として光に反応することを確認した。明るいときは蛹化面に平行になるように体節を曲げ、夜間暗いときは蛹化面に垂直に下がっている。(次図参照)



*夜間垂直状態から点灯すると約3分で平行になるように体節を曲げた。

*蛹の色と蛹化場所の関係について。

	緑色	緑褐色	褐色
葉裏面	3頭	3頭	3頭
ダンボール面	1頭	0頭	1頭

○10月07日 ・変化なし。

○10月08日 ・変化なし。

○10月09日 ・変化なし。

○10月10日 ・変化なし。

○10月11日 ・1頭羽化。—————13:50

・さらに1頭羽化。—————14:40

○10月12日 ・1頭羽化。—————14:50

・さらに1頭羽化。—————15:45

・さらに1頭羽化。—————17:35

○10月13日 ・1頭羽化。————— 7:30

・さらに1頭羽化。————— 7:40

・さらに1頭羽化。————— 9:10

○10月14日 ・1頭羽化。————— 6:40

○10月15日 ・2頭羽化。—————10:15

月・日	個体No.											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
09/22(01)	午前											
	午後	卵	卵	卵	卵	卵	卵	卵	卵	卵	卵	卵
09/23(02)	午前											
	午後											
09/24(03)	午前	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨
	午後	1令	1令	1令	1令	1令	1令	1令	1令	1令	1令	1令
09/25(04)	午前											
	午後	∨	∨	∨								
09/26(05)	午前	2令	2令	2令	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨
	午後				2令	2令	2令	2令	2令	2令	2令	2令
09/27(06)	午前	∨	∨	∨								
	午後	3令	3令	3令	∨	∨	∨	∨	∨	∨		
09/28(07)	午前	∨	∨	∨	3令	3令	3令	3令	3令	3令	∨	∨
	午後	4令	∨	∨	∨	∨					3令	3令
09/29(08)	午前		4令	4令	4令	4令	∨	∨	∨	∨	∨	∨
	午後						4令	4令	4令	4令	4令	4令
09/30(09)	午前	∨	∨	∨	∨							
	午後	5令	5令	5令	5令	∨	∨	∨	∨	∨	∨	∨
10/01(10)	午前	∨	∨	∨	∨	5令	5令	5令	5令	5令	5令	∨
	午後											5令

月・日	個体No										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
10/02(11)	午前	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	午後	▽	▽	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
10/03(12)	午前	前蛹	前蛹	▽	▽	▽	▽	▽	▽	↓	↓
	午後	蛹	蛹	前蛹	前蛹	前蛹	前蛹	前蛹	前蛹	前蛹	↓
10/04(13)	午前			蛹	蛹	▽	▽	▽	▽	▽	▽
	午後					蛹	蛹	蛹	蛹	蛹	前蛹
10/05(14)	午前										
	午後									↓	↓
10/06(15)	午前										
	午後									蛹	蛹
10/07(16)	午前										
	午後										
10/08(17)	午前										
	午後										
10/09(18)	午前										
	午後										
10/10(19)	午前										
	午後										
10/11(20)	午前	▽	▽								
	午後	羽化	羽化								

月・日	個体No.											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
10/12(21)	午前			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	午後		羽化	羽化	羽化	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
10/13(22)	午前					羽化	羽化	羽化				
	午後								↓	↓	↓	↓
10/14(23)	午前								羽化			↓
	午後									↓	↓	↓
10/15(24)	午前									羽化	羽化	
	午後											

*羽化=白色系 ・ **羽化**=褐色系 がそれぞれ羽化した。

今回、偶然にもイシガケチョウを飼育する機会に恵まれ、子供のようにわくわくしながら毎日を過ごさせてもらいました。

そうしたなか、今回の飼育で一番疑問に思ったことは孵化から羽化までの時間の短さでした。あれよあれよと思う間に次々と脱皮を繰り返し成長してしまいました。暖かな室内だったからか、時期的なものなのか原因は良く分かりません。他にも背紋から地域性が分かるとの事ですが（境氏）、目下検討中です。

児童に羽化を見せたらすごく感動しました。が、「先生、これ逃がしてやっちゃろ。」わたしには言葉がありませんでした。

今、このイシガケチョウは標本箱の中で静かに眠っています。

対馬のゲンカイツツジと品種

岡部虎男

対馬は東に対馬海峡、西は朝鮮海峡にはさまれた、南北82km、東西18kmの細長い島で、日本で4番目に大きく、面積も琵琶湖よりやや広い。この島は、朝鮮系の動植物と本土系動植物が混生していることで、生物学上貴重な島である。この島に自生する野生ツツジは、昭和3年(1928)以後の文献をみると原種、変種を加えると十指に及ぶようであるが、現在までの私の調査によると、未調査の地域もまだ多くあるが、すでに絶滅しているものまた、誤認しているものもあると思う。その中でも対馬はチョウセンヤマツツジの唯一の自生地として貴重な島です。

ゲンカイツツジはカラムラサキツツジの変種とされています。ゲンカイツツジは若枝や葉に疎毛が多く日数を経過しても毛が残ることから名づけられたとの事ですが、カラムラサキツツジにも若干の毛はあります。両種を分けることは適当かどうかと書いておられる御人もありますが、私も同感です。学問上では細かく分類されますが、細かに分類して複雑にすることも無いだろうと思うからです。かって、ゲンカイツツジをケ(毛)ゲンカイとしゃれで言う御人に出会いましたが、これも分類の目安として面白いと思ったこともありました。開花期、花形、花色等もほぼ同じで、問題は毛の多少だけのようですから、私は細かく分類して見ていませんが、非常に毛が多く長いものが昭和52年4月29日に500m級の岩山で発見されました。これを栽培していますが、毛も短く少なくなるようですから、環境変化によるものではないかとも、個体差ではないかとも思っています。未だ充分研究していま

せんで、この問題は今後にゆずることにします。

海拔1～2 mから自生

対馬は元来1つの島でした。明治時代に山を掘り割り、万関運河によって日本海と朝鮮海峡がむすばれ上島と下島にわかれています。ゲンカイツツジの分布は上島に多く下島に少ないようです。近年フェリーが通うようになって国県道、町村道ぞいのツツジ類は心ない人にそうとう盗掘されて数が少なくなっていることが残念でなりません。対馬では海拔1～2 mから558 mの岩山まで自生しています。まったくおどろくべき生活力です。海拔1～2 mとなると風の強い時は海水のしぶきをかぶるし、台風するときなどはまともに海水が、根元を洗うのではないかと思われるような所にまで自生しています。対馬には649 m以上の山はありませんが、この山にツツジ類が自生するかどうか調査したことがないのでわかりません。文献にもみえないようです。

シロバナを目標に交配

私の交配のねらいはシロバナゲンカイツツジを多量に得るためでした。昭和44年、自然交雑のシロバナゲンカイツツジから採種したものは白花系と赤花系がほぼ半数位ずつ発芽したので、昭和45年、白花系どうしの交雑を試みました。白花といっても、主弁に斑点の無いもの、斑点が緑や黄色のもの、めしべがピンク色のもの等、産地と個体によって異なっているので、純白に近いものどうしを交配して100%の白花をつくるのが目的でした。交配には袋かけをやったことはいうまでもなく、その結果、100%の白花系を得ることができました。

しかし趣味で種子から栽培されるならば、自然交配のものが面白いのではないのでしょうか。私の白花母体の自然交雑のなかには、色（赤紫色）のうすいもの、花卉の外から花芯にかけて白くぼけたもの等、変化のあるものでました。実生苗から白花系と赤花系をみわけることは簡単ですから、私は自然交雑の物を趣味の方にはおすすめします。

実生のしかた

《採種》

10月の中旬、さやが少々茶色に色づいたころ取り、器に入れて乾燥させると自然にさやがはじけ種子を出します。

《まき床の準備》

種子まきの材料としては5-6号の素焼きの平鉢、この鉢にふたをするガラス、水苔。水苔は雑物を除きよく水洗いして強くしぼり、熱湯を充分かけてしばらくおきます。これは消毒だけでなく、雑草の種子や水苔を枯死させるためです。生きている水苔や、雑草の種子は芽を出し、ツツジの苗より早く大きくなるのでよくありません。

《まき方》

水苔は強くしぼって水を取り日光で乾燥し、5mmのフルイに手でこすりつけて粉にし、これを水にいれ十分水を吸わせ、かるくしぼって前記の鉢に入れ、鉢の上縁が1、5cm位あく程度に入れます。充分おちつかせて種子をまき、ガラスのふたをします。種子は非常に小さいので、できるだけむらにならないように充分注意してまきます。

《冬の管理》

11月10日前後に播種しましたが、寒さにむかうので1日でも早くまく

ほうがよいでしょう。私は半地下式の小形フレームなので、日光が直射しないところに置きました。約30日で発芽します。全部の種子が発芽しおわたたら、ガラスを取り、弱い直射にあて苗を直射日光にならしていきます。あまり密に発芽したところはピンセットで間引きをします。水苔が乾燥しないよう常に水分が切れぬ程度にふんむきで水を与えます。凍結は良くありませんが、凍らなければ越冬できます。肥料はあたえません。

《植替え》

桜の花が咲くころ、1本1本6cm鉢に水苔で植えます。12cm鉢に3-4本ずつ植えても良いし、発泡スチロールの箱でもかまいません。

《苗の見分け方》

白花系は本葉も幹もうす緑色であり、赤花系は葉も緑が濃く幹も赤色なので見分けがつかます。ツツジの種子まきははじめてでしたが、よく見分けることができましたので、初めての方でも容易にできると思います。

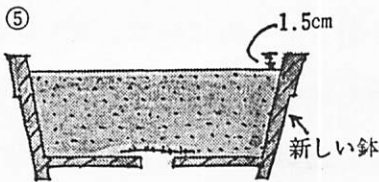
《1年目の管理》

植替え後は日当りの良い場所に置き、生育期間中は水肥を随時与えます。苗が小さいときは虫に食われたりしますので、ダイシストンを少量ばらまいて防除します。

《本植え》

次の年3月中旬ころ、苗の大きいものから本植えを行ないました。用土は硬質鹿沼土3、ぼら土5、腐葉土2、苗が細いので5mm目のフルイ以下の土もちろんミジン粉は除いたもの。鉢は3号鉢で2年位は植替えはしませんでした。本植えの時は水苔はできるだけ取った方がよいが、無理してとることもないようです。むろん屋外栽培です。

肥料は植替え後1ヶ月後位から、油かすに2割の骨粉を混合したものを月

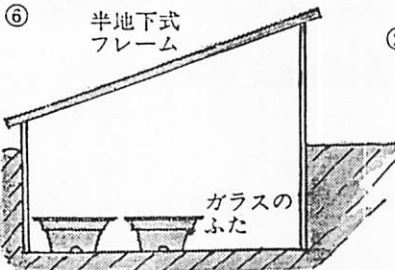


充分水を吸わせて軽くしぼり鉢
縁から1.5cmあく程度に入れる

種子のまき方



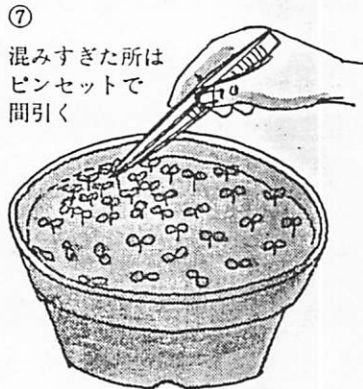
ゴミ等を取り除く



フレーム内の日光の直射しな
い所に置く。約30日で発芽



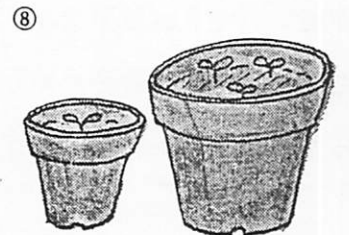
熱湯を充分にかけて
しばらく置く



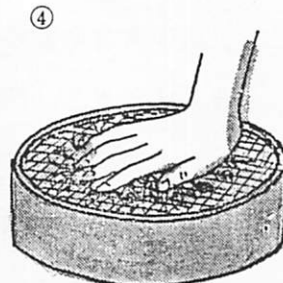
全部全芽したらガラスを取り
弱い直射に当てて苗をならす



強くしぼって水を取り
日光で乾燥する



2号鉢に1本 3~4号鉢に3~4本
桜の咲く頃水苔に植え広げる



5mm目のふるいに手で
こすりつけ細かくする

に1回、少量ずつ与えます。また、ぼら土に腐葉土2割だけでも充分栽培出来ましたので、水もちと水はけに注意すれば、地元で得られる土で良いと思います。

《開花》

このようにして一番早く開花したのは発芽から830日目です。次の年は多数咲いてくれましたが記憶にありません。種子の取りまきをするとはやくなるのではないかと考えています。白花系は、幼苗時代、赤花系に比べるといくらか弱いようなので、栽培には特に注意をしていただきたいものです。

品種

シロバナゲンカイツツジは、基本色のゲンカイツツジから突然変異で生れたものとおもわれますが、あるいは、紫紅色の色の薄いものからつぎつぎと世代のかわるごとに紫紅色がぬけていき、花卉は白く雌しべ、雄しべに薄い紫紅色を残し、さらに雌しべだけ薄い紫紅色を残し雄しべは白色となり、次に斑点（ブロッチ）を残して花全体が白色となり、ついに斑点までなくなったと考えられないこともないようです。

とき、あけぼの、しろばな（黄褐色または緑の斑点のあるもの）以上4株は、極小区域、幅1m位の山道の両側から発見したもので、樹齢も異なっていましたし、野生のものから私自身が感じたことであって、真実は「造化の神」のみが知ることと思います。私は秋の紅葉が黄色くなるものを白花系、赤くなるものは、いかに色が薄くとも赤花系として区別することにしています。

次に花に変化があるもので、私が命名したものについて、ご紹介しましょう。

とき

白花系。波打ち咲き。花弁はとき色。弁の基部、特になく片の近くが色が濃く、弁先に向かってぼかしています。黄褐色の斑点があります。

あけぼの

白花系。波打ち咲き。とき、嶋さくらよりさらにピンクが薄く、蕾の時の色は鮭肉色にピンクを加えたような色で表現に苦しむ色合いです。白花系とは思われないような色です。

南風（なんふう）

白花系。白花、波打ち咲き。雌しべ、雄しべに薄いピンク、雌しべは雄しべより色は濃い。または雌しべだけが薄いピンクで雄しべは白のもの、黄褐色の斑点があります。

しろばな

白花系。波打ち咲き。花弁は白。上弁に黄、黄緑、または緑の斑点があり個体により濃淡の差があります。

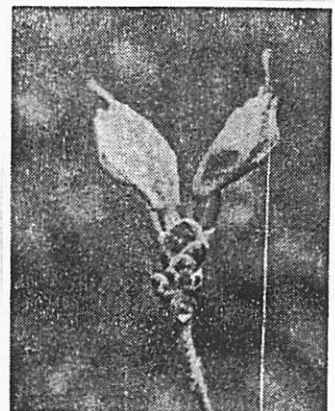
仁風（じんふう）

純白、波打ち咲き。斑点はなく、雌しべ雄しべは薄い緑をおび、清楚な花で、白花中最上のものと思います。

みどり

白花系。見染性（みそめしょう）

昭和45年、シロバナゲンカイツツジ交配播種した物の中に、昭和50年3月家内が小形の花の咲いているのを発見しました。私は



開花の数日前に雌しべが突きでる

栄養不良で花が小さいのだろうと思っていましたが、翌年3月にもまた、小形の花が咲きました。花形は正形ではなく波打ち咲きというか、変形の花で花径2、5cm前後雌しべと雄しべは普通のゲンカイツツジと同じ長さなので、特に長く見えます。花弁も、雌しべ、雄しべも、基部から先にかけて緑が薄くぼかしています。花後日数がたつにつれ緑は濃くなっていくようです。特に面白いのは、開花数日前に雌しべが蕾よりぬけでて先にでることです。、花弁とさや雌しべ、雄しべは茶色になりますが、12月までついていきます。



花弁は緑色になりいつまでも残る

雌しべはさやが五裂に開いて種子をだすとき落ちます。花弁は茶色に変色してもさやを覆うような姿でいつまでも付いています。

嶋桜 (しまざくら)

赤花系。波打ち咲き、全弁桜色。開花後も退色せず、ときより花色は薄い
が、秋紅葉するので赤花系としています。

HITOTSUBATAGO No. 8

スジグロシロチョウの記録

境 良朗

対馬では比較的少ない本種を採集しているので記録しておく。

- 1990年8月19日 千俵蒔山 1♂
- 1990年9月15日 豆酸 1♂

(志多賀小学校)

ウリ科植物の利用

浦田明夫

ウリ類は食用としてまた、観賞用あるいは民具などとしてこれまでよく利用されている植物である。私は今までキュウリ、ハヤトウリなど主として食用に供したウリ類は栽培したことがあるが、以前種苗のカタログを見たときにセンナリヒョウタンが目についた。もう15年ほど前のことである。さっそく、種子を取り寄せ栽培し、多数の小形のヒョウタンを得、それ以後毎年のようにつくってきた。そこで今まで栽培したウリ類の中から3種を選び、その利用法をまとめることにした。

ヒョウタン

ヒョウタンはユウガオの変種といわれている。ユウガオといえば、ヒルガオ科の仲間夕方白いあるいは紫色の大きな花をつけたものを指していると一般に考えられているが、本来はヨルガオと呼ぶべきものらしい。従って本来のユウガオというのはこのウリ科のものをさすわけである。さてこのユウガオはアフリカまたは熱帯アジアの原産の一年生のツル性植物である。果実は長大で60～90cmで内部には厚い白色の果肉がある。果肉は煮て食用とするほか、果肉をヒモ状に切って乾燥しカンピョウをつくる。

ところでヒョウタンは分類学的には前述の如くユウガオの変種で、その果肉を除き酒器などをつくる。ヒョウタンは成熟すると果皮がかたくなるので、その果肉を除き容器や酒器、装飾品、食用のほか医用にも利用され、多種多

様の使用法利用法が知られている。ヒョウタンの果実は実に多形で、また人工加工を施せば更に趣のある独特の形をつくりだすことができ、手造りの容器として、あるいはオリジナルな装飾品として仕上げるのも楽しいもので、もう一度見直したいものである。

私はこれまで果実が小形のセンナリヒョウタンを栽培したが、春の彼岸頃種子をまくと、秋の彼岸過ぎにはヒョウタンが熟してくる。若い果実は表面に毛があり緑色、その毛が落ち脱色をはじめ、指で押しても弾力がなくなった頃取り入れる。次にこの果実のなり口のところに穴を開け、水を入れた容器に沈める。そのままでは浮き上がるので重し蓋などするがよい。2週間くらいすると皮がはげてきたら中身が腐っている頃なので、穴から腐った部分や種子を取り出し、中を空にする。中身を完全に取出したら日陰で乾燥する。中身を腐らせるので悪臭が残る。

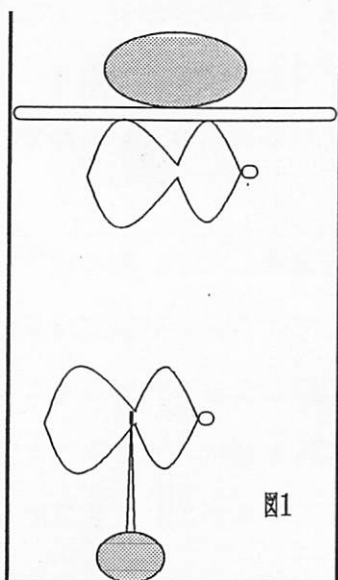
乾いたヒョウタンには、穴に栓を作ったり、くびれた部分に飾り紐などを付けて適当に仕上げる。乾燥するとき、薄くニスなどを塗って艶出しをしてもよい。また中に酒などを入れると味のある色が出せるという。

また、焼きごてや火ばしなどを焼き、それで表面に模様をつけるのもおもしろいかもしれない。形の加工としては、成長の途中、果実をわくなどに入れておけば、そのわくの形になる。私の家にはこうした自製のセンナリヒョウタンが現在5個残っている。作ってもう十数年になるが自然の色を十分出して趣のあるいいものとなっている。

《中味のぬき方》

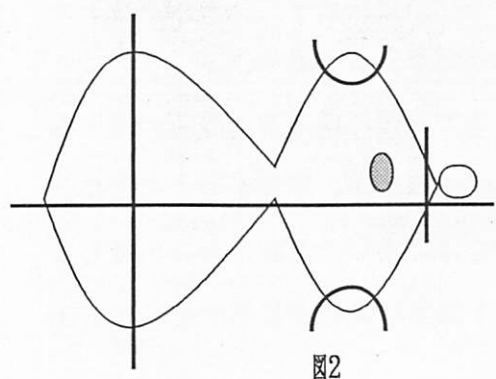
- ・容器に水を入れ、穴の開いたヒョウタンが浮き上がらない

〔図1参照〕



- ように重しぶたに重しを乗せて中味を腐らせる。
- またはくびれた部分をひもでくくり重しをつけて浮き上がらないようにする。
- 温度が高いほど腐りやすい。

《加工のしかた》



- 穴を開けたり、切断したりする
- を開ける
- 鋸などを使って切断する

ヘチマ

熱帯アジアの原産で各地で栽植されている。果実は緑色長大で円筒形、30

～40cmの大きさであるがナガヘチマと呼ばれるれ変種は100 cm～ 200cmもある。

ヘチマも春の彼岸頃が播種期であるが、5月上旬くらいまではよい。予定地に直接播種するか苗を植えてもよいが、予め、そこには堆肥や鶏糞など施しておくで成育もよい。家庭ではプランタや大形の鉢でも栽植できるが、棚づくりも楽しいし、夏の日よけなどにも利用してもよいようである。

今年久し振りにヘチマを植えてみた。それは勤務校である琴海高校に昨年(1989)シーボルト庭園やツンベリ植物園という教師と生徒による手造りの庭園が完成した。その一端に薬草園も設けられたのでヘチマ植えを思いついたのである。ヘチマの利用の中で、今まで未経験なことは果実を食用にすることであった。ヘチマを食べることは対馬では考えてもみないことであったが、私の知人でもある湯浅浩史氏の著書(1981)に食用になることが記されており、食べてみることにした。それによると、ヘチマの若い果実は柔らかく、筋もないので皮をむき、他の野菜などと煮込みやスープ、油いためなどにすれば特有の風味がある。また味噌汁とよく合い、てんぷらや漬物にも向くらしい。機会があったら是非試食されては・・・。

さて、2番目の利用としてはヘチマ水。天然の化粧水として古来著名である。ヘチマ水を取るには9月の雨上がり。茎を地上に50cm位のところで切り根のついている方の茎の先をピン(1.5ℓのジュースピンなどがよい)にさし込み、脱脂綿などでごみなどが入らないように栓をし、さらにその上に全体をアルミホイルで覆う。数時間後の観察では切り口から1滴1滴とヘチマ水が侵出し、一日ではほぼ1ℓ以上になるので、この原液を濾紙(コーヒー用ペーパーフィルターで可)でこし、これに防腐剤や殺菌剤として安息香酸を1ℓにつき2gを溶かすと、そのまま長持ちする。これをこのまま利用し

てもよいが、次のような処方をしたほうが、肌にしっとりとしてよいようである。

へちま水1ℓ（安息香酸2g）

エチルアルコール（エタノール）50CC

グリセリン50g

へちま水は古くから使われているが、中のどの成分が肌をすべすべさせるのか等はよく解明されていないようである。わたしは、このへちま水を朝の髭剃りあとに利用している。

その次ぎの利用はタワシである。へちまをぶらさげる茎が黄色くなってきたら、これをそのまま乾燥させ、かたくなったところで皮をむき、中の種子を取り出して利用するか、先端に穴を開け、水が入りやすくした後、水を入れたバケツなどにつけて水面に浮き上がらないように重しをする。1週間位で皮がむけてくるので、繊維だけを残すように水洗いをして乾燥する。水にながくつけすぎると、繊維をいためる。

一本の木からへちま水もタワシもというのは両立しにくい。それはへちま水が十分とれる時期には果実は成熟していないし、果実が成熟した時には根圧が小さく、水分が上昇しにくいからである。

さて、その他の利用としては、家庭ではほとんどできないが、適当に加工して靴の中敷に利用するなどいろいろな利用法が考えられよう。

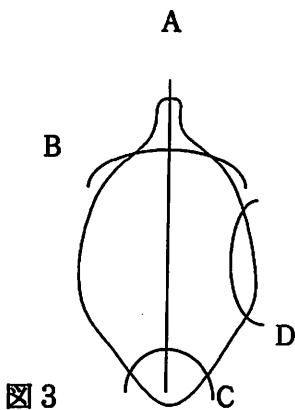
フクベ

ユウガオの変種で、対馬では「ハケ」と呼んでいる。果実は非常に大きくやや平たい球形で表皮は著しく硬化する。果実からはカンピョウもつくるが

対馬では果実を2分し、中味を除いて乾燥させ水くみびしゃくとして古くから利用されていた。近頃は、その果皮に描画してインテリアとしての利用も見られるようである。はけは軽く丈夫で、手によくフィットしてにぎり易いので、田舎では特に大釜を利用するとき水をくみ入れたり、出したりするときには、これほど重宝されたものはなかった。

さて、数年前、対馬高校のときの教え子である大江正康氏がやってきて、「はけ」を作らないかと言って種子を持ってきてくれた。そしてそれを私の裏の空地にまいたところ、秋には数個の「はけ」が実った。そこでとりあえず2分して中味を除き、乾燥させておいたところ、今度はまた、教え子の友納徹氏に出会った。その話をしたところ「はけ」に絵をかきましょうということになり、預けいたら、大和絵調の描画がほどこされみごとな作品となって、今では私のインテリアの一部となっている。こうした「はけ」のような円形物に筆を入れることは大変困難なことで、彼の筆はそれをみごとに克服しているようで、今後この方面に新境地を開いてくれることを期待したい。

フクベはいわゆる「はけ」としての利用だけでなく、図3のような切断の方法等工夫すれば、その特性を生かし、素朴さも加えて立派なインテリア等として利用できるのではないかと思われる。



加工（切断）のタイプ

各々A, B, C, Dの部分を
市販の糸のこを使って切断

図3

(琴海高校)

対馬の鳥類調査

浦田明夫

長崎県教育庁文化課により対馬の天然記念物の調査が1988年より3年間野
予定で実施されている。その鳥類の第1回の調査に参加したので、その時確
認した鳥類を記録しておきたい。この第1回の調査の主な目的は、対馬に冬
季飛来するワシ類の現状を把握することと対馬の冬鳥を確認することにあっ
た。

1990年2月26日

○佐護

ハシブトガラス、ハシボソガラス、コクマルガラス、スズメ、ヒヨドリ、
ツグミ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、ミサゴ、オオタカ、トビ。

佐護は全国的に知られる探鳥地である。海辺の鳥、水辺の鳥、里の鳥など
各種の鳥の飛来が見られる他、北帰行中のマナヅル、ナベヅルも近年は毎年
のように立ち寄る。またオオワシなども海岸近くにやってくるが、今回の調
査では確認することができなかった。

2月17日

○志多留、田ノ浜

ハジロカイツブリ、マガモ、トビ、チョウゲンボウ、ハシボソガラス、ハ
シブトガラス、ヒヨドリ、ホオジロ、ジョウビタキ、コサギ。

佐護でも確認したハジロカイツブリが見られたが、対馬では比較的少ない
ように思われる。海岸、河口、入江、川などに冬鳥として飛来する。

2月28日

○ミノドンの滝

ミソサザイ、ヒヨドリ、トビ、ハシブトガラス、ハシボソガラス。

ミノドンの滝は御岳のふもとにある滝で、ワシ類の水飲み場として、また水浴場として知られているが、現状からして、近年ではほとんど利用されていないのではないかと思われる。

○仁田

コクマルガラス、ミヤマガラス。

畑の中でカラスの群れが見られた。よく見てみると、その群れのほとんどはコクマルガラスで27羽。そのうち淡色型（後頸、頸側、胸、腹が白い）が2羽、ミヤマガラス5羽であった、本種は冬鳥として主に九州地方に渡来し、ミヤマガラスの群れに若干混じるのが普通であるが、今回の場合は逆で、コクマルガラスの群中にミヤマガラスが混じているという感じのものである。コクマルガラスは、近年対馬で見られるようになってきている。

○目保呂

キジバト

○木坂

ベニシコマ、アオバト。

3月1日

○芦が浦

ウミネコ

○狩尾

ウミネコ、ハシブトガラス、トビ。

○木坂

キジバト

○青海

ヒヨドリ

○和多津海神社

ミヤマホオジロ、シジュウカラ、メジロ。

○烏帽子岳

チョウゲンボウ

○竹敷

アオサギ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、ウミネコ、セグロカモメ。

○洲藻

ハシブトガラス、キジバト。

3月2日

○加志

ノスリ、トビ、ハシブトガラス、ミヤマホオジロ、ホオジロ、ジョウビタキ、キジバト。

○尾崎

ハシブトガラス、ハシボソガラス、ミヤマガラス、ウミネコ、トビ、ヒヨドリ、アオバト、ジョウビタキ、ミヤマホオジロ、ハクセキレイ。

○阿連

ミヤマガラス、コクマルガラス、トビ、ヒヨドリ、メジロ。

○巖知ダム

コガモ、オシドリ。

調査期間中、目撃観察できた鳥類についてその種名（和名）のみを列記した。1羽だけ見たもの、群で見たもの全てその和名のみをかかげている。今回ワシ、タカ類の目撃が非常に少なく、また観察した種類数も多くない。とにかくワシ類の発見だけに双眼鏡を向けていたのもこうした結果になったものと思われる。

その後も調査を行ったが、これらの調査の概要については天然記念物調査報告書で解析することになっている。

調査にあたっては、長崎総合科学大学兼松仁郎教授、長崎県野鳥の会柿田周造会長にはいろいろとお世話になりご指導賜った。最後になったが厚くお礼申し上げます。
(琴海高校)

HITOSTUBATAGO No. 8

セミの初鳴日

境 良朗

対馬には6種（ニイゼミ、ツクツクホウシ、ミンミンゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、チョウセンケナガニイ）のセミが分布している。1990年の初鳴日と終鳴日を記録しておく。

《初鳴日》	・ニイゼミ	6月23日	三根	
	・ツクツクホウシ	7月11日	仁位	夕方
	・クマゼミ	7月23日	志多賀	8:15頃
	・ミンミンゼミ	7月25日	仁位	18:00頃
《終鳴日》	・クマゼミ	9月7日	志多賀	
	・アブラゼミ	9月7日	三根町大久保	

チョウセンケナガニイニイは対馬特産種、秋季10月頃出現するが、分布域の調査は十分でない。会員の皆さんの協力をお願いしたい。（志多賀小）

オウゴンオニユリについて

國分英俊

オウゴンオニユリについては何度も書いてきたが、この郷土の宝とも言える植物をもう一度見直す必要があるのではなかろうか。今ほど村おこし、島おこしを言われている時代はなかったのではないかと思う。どの地域でも何か特産物をと探しているがなかなか良いものはなく、あったとしても日本のどこかにいけば手に入るものばかりで、その地域にのみあるものというそんなにあるものではない。対馬には約100年も前から上県町の女連で大事に守り育てられたオウゴンオニユリがあるのである。このオウゴンオニユリは対馬ではあまり知られていないが、ユリの育種家にとって、なくてはならないユリであって、数々の有名な園芸品種をうみだした親ともなっているユリなのである。このように素晴らしいオウゴンオニユリを利用しないで、そのままにしておくことはないと思うのである。栽培については本誌7号に岡部会員が書いておられるので、参考にしていただきたいが、ぜひ、われわれの手でオウゴンオニユリを栽培、増殖し対馬にオウゴンオニユリありと世の中に知らせたいものである。

現在、私の手元に約600個のオウゴンオニユリのムカゴがある。これは上県町在住で、熱心に増殖してみようという方がおられるので全部渡す予定である。多分、数年もすると数千～数万球に増殖されることと思う。この増殖されたオウゴンオニユリを、ある地域に集中して植え、公園をつくるなり道路ぎわに植えるなりしたら良いのではないかと思う。もちろん球根は買上げてである。

また、対馬の2ヶ所の異系統のオウゴンオニユリを交配してできた種子を1990年11月に播種したものが、140本ほど発芽して順調に生育している。これは黄色の新しい品種のオウゴンオニユリであり、どのような花になるのか、大変楽しみである。(オウゴンオニユリはムカゴ繁殖であり、同系統では種子は出来ない)

(久原中学校)

HITOTSUBATAGO No. 8

《提言》

ツシマジカ

國分英俊

1991年1月7日上県町鹿見において、雌のツシマジカ1頭が犬(野犬か猟犬かわからない)に追われ疲れきってうずくまっているのを中学生が発見し教えにきた。行ってみたところ、川の土手に前足を折曲げてじっとしているツシマジカの雌(成獣)を見ることができた。非常に疲れているとみえて1m位に近付いても逃げようとはしなかった。写真を撮りちょっとおどかしたところ、50mくらい逃げて日当りのよいやぶに入込んだ。一生懸命に立ちあがってこちらを見ていたがしばらくすると、すわりこんでしまった。近付いても今度は逃げる気力も失っているのかじっとして動こうとはしなかった。このままにしておくと、通りがかりの人に発見され殺されることは目にみえているので、無理に追立て山道をのぼらせた。足取りはよろよろでかわいそうであったが、ツシマジカのためには良かったと思っている。

今年も猟季に多くのツシマジカが殺されたと思う。なんとかこの野蛮な狩猟をやめさせることはできないものであろうか。

(久原中学校)

《提言》

自然に親しむ

子どもを育てよう

佐伯正發

○子どもに多くの体験を

科学技術の進歩、情報化時代、個性化、国際化の時代を迎え、その流れはどどまるところを知らない。そして、行く先は不透明であり予想しがたい時代である。また、合理性や経済性を重視したシステムで動いている現在、人間としてかけがえのない存在が軽んじられたり、あたたかい心と心のふれあいや、その場が失われているのではなからうか。

特にあたたかい思いやりに失われる主な原因としては、学歴社会と管理競争社会のひずみ、都市化の進展と生活共同体の崩壊、家庭や社会の教育力の低下、学校教育の画一化、閉鎖性、硬直化など色々な問題がある。

このような環境で育つ最近の子どもたちは、塾や稽古に通い、家庭ではテレビやファミコン等で部屋に閉じこもって過ごしている。地域の上級生が下級生を集め指導して、ごっこ遊びをしたりする集団の遊びをほとんどしない。反面、情報化時代のためか、間接体験による知識は多く習得しているようである。知識のみで、直接体験に乏しい子どもたちは、自然や生命に対する畏敬の念を失ったり、相手に対する思いやりに欠け手射るのではないだろうか。

特に児童期の小学生には、強健な体をつくり、心に栄養をたくわえる基礎づくりの重要な時期であると思う。自然にふれ、親しみ、体験を通して、感じさせ考えさせて、身につけることが大切ではなからうか。

○学校生活で体験学習を

日常の家庭生活や遊びの中で、大いに実体験のできる環境づくりに努めなければならないが、生活様式が変化し、家庭で飼育や栽培をしようにも困難な実態が多くある。せめて小学生の頃、学校生活の中でも、家庭でできない面をカバーし、できるだけことは体験させたい。特に飼育、栽培、観察採集等により、動植物に接し、土に親しませ、汗を流し、そのよろこびや苦しみ悲しみを体で感じとらせたい。

このような観点から、私は次の活動を取り入れ、実践に努めている。

①観察遠足

- ・秋に植物を中心として観察や採集をしたり、スケッチをしたりして、自然とふれあい楽しい一日を過ごす。

②花いっぱい運動

- ・草花を栽培することにより、植物をいとおしむ心や、やさしい心を育てる。
- ・PTAや老人クラブと栽培活動を共にし、心の交流をはかる。

③飼育活動

- ・うさぎや小鳥の世話を実際に体験させることによって、そのものに対する理解や愛情を深めさせる。

その他、全校で親子社会科見学、わら細工、竹細工、釣り大会、凧あげ大会などを実施している。

山あり、海あり、この美しい対馬の恵まれた環境を活用し、自然にふれさせる体験学習を重視したい。

(浅藻小学校)

イワウメツル発見

(*Celastrus flagellaris* .Rupr;)

永留 浩

長崎県内では初の産地 : 下県郡美津島町今里^{いほざと}

イワウメツルはニシキギ科、ツルウメモドキ属である。落葉つる性低木、枝は細く赤褐色で、初め微細な乳頭状突起があるが、表皮は剥離しやすい。節から気根を出し他物にはい上ることができる。托葉は上方が硬化して反曲し短い棘となる。茎は初め褐色（赤褐色）で短毛があるが後に灰褐色となる。根の内皮はオレンジ色をしている。葉は互性で葉柄は0.5 ~ 1.5cmで細い。長さ3 ~ 6 cm、幅2 ~ 4 cmで広楕円形または卵形でやや薄くて硬く、無毛または時に下面脈上にやや小突起毛、上面に細硬点がある。細脈は下面では明瞭である。縁辺には小刺毛に終わる細鋸歯があり、先は急に鋭頭または鋭小頭、基部は鋭形、花は6月ごろ葉腋に1 ~ 3個ずつ生じ、黄緑色、径6 mm、雌雄異株、小花柄は2 ~ 6 mm、花弁は5、長楕円形で長さ3 ~ 4 mm。果実は球形、径約6 mm、3裂して中から橙赤色の仮種皮につつまれた種子が現れる。

本種の自生分布は関東地方以西の本州、四国、九州、朝鮮、満州、アムール、温帯、暖帯。

本種を発見としたのは、長崎県内から出版されている次の書物に記載されていないからです。

1 長崎県植物誌 (外山三郎)

2 新長崎県植物誌 (松林文作)

3 対馬の花 I・II (邑上益朗)

4 対馬の生物、壱岐の生物、五島の生物 (長崎県生物学会)

5 壱岐の植物 (品川鉄摩)

参考文献 省略

(今里中学校)

HITOTSUBATAGO No. 8

対馬産アゲハモドキの翅脈について

境 良朗

本種は蛾でありながら非常に特異な翅形をしており、名のように一見アゲハチョウに似ている。普通の人が見たら、蝶の仲間と間違えるのではなかろうか。アゲハモドキガ科を形成し、日本ではこのアゲハモドキ(*Epicopeia hainesii* Holland) 1種を産する。

対馬産は亜種 *tsushimana* Inoue として区別され、その根拠として①Mは中室内で2分しない。②後翅表面7室に赤紋を現さない。とされている。

[形質の違い]

昨年度(1990)、5頭を採集する機会に恵まれ調べたところ、前述の亜種としての形質が、必ずしも強く、かつ一定したものではないことが分かったので報告する。

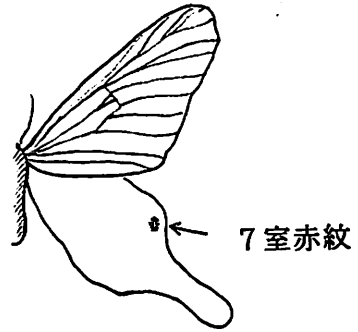
5個体とも、豊玉町仁位で灯火採集によって得られたものである。この内



対馬亜種

2個体においてMは中室で2分し、また1個体には後翅表面7室の赤紋が明瞭に発現していた。

したがって、対馬産においては原名亜種と区別できない個体もあると考えたほうが無難であろう。今回は個体数が少なかったので、さらに注意をはらい、多くの材料を得てから考察を加えてみたいと思っている。



原名亜種

(志多賀小)

HITOTSUBATAGO No. 8

キンオニクワガタの一産地

境 良朗

キンオニクワガタは、日本では対馬だけに産するクワガタムシである。オニクワガタといういかめしい名前をもっているが、一番ポピュラーなヒラタクワガタ（対馬亜種）よりずっと小さく、コクワガタよりも一回り小形である。過去に白岳、竜良山、有明山などで採集記録がありことから、筆者も比較的高所の原生林を生息環境にしているものと思っていた。

ところが昨年（1990）、東海岸の志多賀で灯火に飛来したと思われる個体を採集しているので報告する。

〔記録〕 1990年7月23日 峰町志多賀 1♀（生体）

1990年7月24日 " 1♂（死体）

(志多賀小)

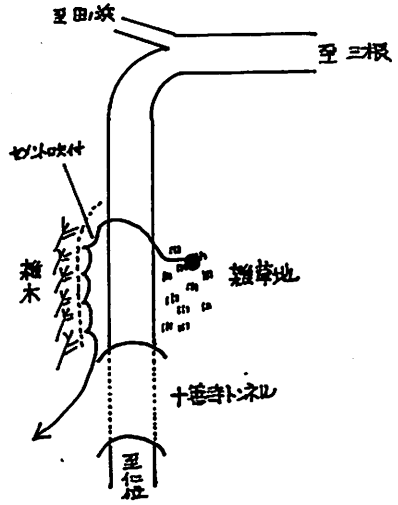
1990・イシガケチョウ目撃記録

杉 寮

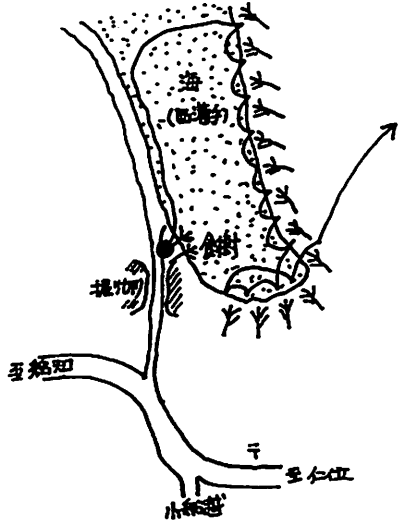
1990年秋、島内各地でイシガケチョウを目撃したので報告する。

(凡例) ①日時 ②場所 ③天候 ④目撃した状態

- (1) ①1990・9・16, AM11:50
 ②豊玉町田
 ③晴天弱風
 ④道路わきの草地から飛び出し道路を横断、その後セメント吹き付け崖の上の方の雑木の梢上を滑空しながらトンネル方向へ飛び、山中へと消えた。



- (2) ①1990・9・22, PM1:15
 ②美津島町小船越
 ③晴天無風
 ④西漕手湾の奥で食樹イヌビワに産卵する母蝶発見。しばらく観察し採集を試みたが取り逃がす。対岸の雑木周辺を飛び回りそのまま山を越えた。

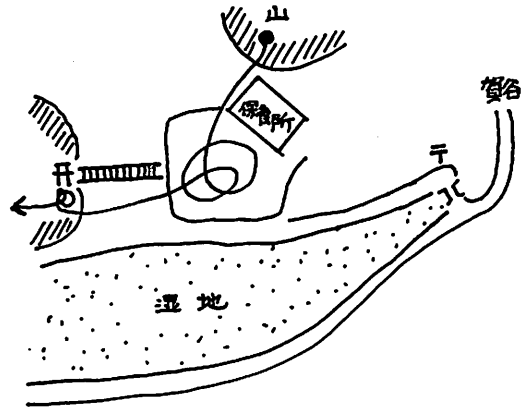


(3) ①1990・10・28, AM11:00

②美津島町賀谷

③晴天微風

④保育所北側の山より飛来、運動場上空を旋回し西側にある神社の雑木上にしばらく静止その後神社を越えて飛び去る。

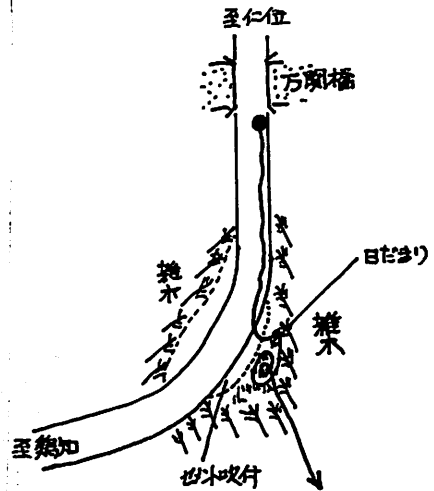


(4) ①1990・11・11, PM12:45

②美津島町万関

③晴天微風

④万関橋方向より飛来、セメント吹き付け上端に沿って滑空、小さな日だまりで雑木に静止、しばらくしてそこで数回旋回し、雑木を越えて飛び去った。

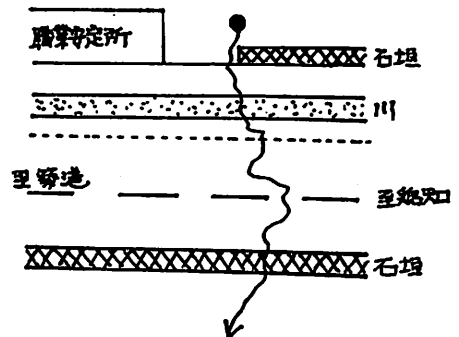


(5) ①1990・11・12, AM10:30

②巖原町棧原

③晴天弱風

④職業安定所横より飛来、少し風があったため羽をばたつかせながら道路を横断、向かいの石垣の中に飛び去った。



(鴨居瀬小)

甲虫とカメムシの記録

境 祐輔

日曜日と夏休みを利用して、お父さんに昆虫採集に連れて行ってもらいました。今年は、主に甲虫類とカメムシ、トンボ、蛾を採集しました。標本にするのは、まだ難しいのでお父さんにしてもらいましたが、名前を調べるときは、ぼくも協力しました。全部、1990年の記録です。今年はずっとがんばりたいと思っています。

《カミキリムシ》

ヒメクロトラカミキリ	6. 10和板	トビイリカミキリ	7. 14仁位
シラケトラカミキリ	6. 16仁位	アメイロカミキリ	6. 16仁位
エグリトラカミキリ	6. 10和板	ヨツキボシカミキリ	6. 27仁位
クビアカトラカミキリ	6. 16仁位	ミドリカミキリ	6. 10和板
カンボウトラカミキリ	6. 16仁位	リンゴカミキリ S P	6. 10大船越
ムネダラトラカミキリ	6. 16仁位	サビカミキリ S P	6. 27仁位
ウスイロトラカミキリ	6. 16仁位	ゴマフカミキリ	6. 16仁位
キイロトラカミキリ	6. 16仁位	ベニフカミキリ	6. 23仁位
トラフカミキリ	7. 14仁位	クロカミキリ	8. 17上見坂
ツヤケシハナカミキリ	6. 16仁位	アオスジカミキリ	8. 17上見坂
ヨツスジナカミキリ	6. 27仁位	ゴマダラカミキリ	8. 17上見坂

《コガネ類》

ヒメビロウドコガネ	7. 1仁位	アオハナムグリ	6. 27仁位
コイチャコガネ	6. 10和板	アオドウガネ	8. 17上見坂

マメコガネ	6. 27仁位	シロテンハナムグリ	8. 17上見坂
ヒメトラハナムグリ	6. 16和板	マルオクロコガネ	6. 23仁位
《その他の甲虫》			
ヒゲコメツキ	6. 23仁位	マダクロホシマムシ	6. 10和板・6. 27仁位
オオハシモンバクマコメツキ	6. 10和板	シダグロオオケシキスイ	6. 27仁位
ノコギリクワガタ	7. 15唐洲・8. 17上見坂		
《カメムシ》			
オオメカメムシ	7. 1仁位	アオクサカメムシ	6. 23仁位
ヒメハリカメムシ	6. 27仁位	エビイロカメムシ	6. 10和板
ホシハラビロハリカメムシ	6. 10上見坂	ハサミツノカメムシ	6. 10大船越
ヒメホシカメムシ	7. 1仁位	ツマキホシカメムシ	7. 1仁位
オオホシカメムシ	8. 17上見坂	アサキホシカメムシ	6. 10大船越
クモハリカメムシ	6. 23仁位		
《トンボ》			
ハラビロトンボ	8. 19田ノ浜	リスアカネ	8. 19田ノ浜
ショウジョウトンボ	8. 19田ノ浜	シオカラトンボ	8. 19田ノ浜

(豊玉小3年)

HITOTSUBATAGO No. 8

ツシマウラボシシジミの新産地

境 良朗

本種の原名亜種はアッサム地方に産し、対馬産には tsushmanus の亜種名が与えられている。北部を中心に分布するが、豊玉町での新産地を記録しておく。現在までのところ、最も南部の記録は和板である。

・1990年7月26日 豊玉町和多都美神社社叢 1♂ (目撃)

蝶類 4 種の交尾飛翔記録

境 良朗

蝶類では交尾したときに、自然にまたは人為的に驚かせたりすると飛翔を行う場合がある。そのときのパターンは通常、次に示す3型に分けられている。

[←♂ + ♀] ♂が♀を引き連れて飛翔する。♀は飛翔しない。

[♂ + ♀ →] ♀が♂を引き連れて飛翔する。♂は飛翔しない。

[←♂ + ♀ →] ♂♀ともに飛翔する。交換飛翔ともいう。

昨年度(1990)、次の4種の交尾飛翔を観察したので記録しておきたい。

・ウラギンスジヒョウモン

6月17日。佐須奈でPM 3:55 に葉上で交尾中の個体発見。4回いずれも♂ + ♀ → で飛翔。

・タイワンモンシロチョウ

8月19日。千俵蒔山で交尾飛翔中の個体。静止後、近づくと←♂ + ♀ で続けて2回飛翔。

・モンシロチョウ

9月15日。豆殿。←♂ + ♀ で飛翔。

・モンキチョウ

9月15日。豆殿崎で交尾中の個体発見。近づいても、なかなか飛ばうとしないので、驚かし強制的に5回飛ばすと、①←♂ + ♀ ②←♂ + ♀ ③♂ + ♀ → ④←♂ + ♀ ⑤♂ + ♀ → で交換飛翔。

(志多賀小学校)

北帰行 (ツル)

山村辰美

こどもの頃より、毎年大きな声で群になり、夜だけ鳴いて渡る大きな鳥がいた。春にはまだ遠い寒い時期である。その頃より、この鳥が渡ってしまえば春が来ると思っていた。なぜこの鳥は夜だけしか飛ばないのだろうか、子供心に考えたこともあった。鳴き声だけは毎年聞くが、姿は一度も見たことはなかった。親達に聞いても、ガンカツルだろうと言うだけで、はっきりした返事はなかった。

中学生になった頃だったろうか、月夜の晩、風呂に入っている時だった。またあの鳥の鳴き声がしてきたが、着替える間がなかったので家の上に来るのを待ち、裸のまま風呂から飛び出した。だが、鳥の姿を見ることはできなかった。声は近いようでも姿は見えないこともその時知った。おそらく高く飛んでいたのだろう。現在のようにテレビがあれば、すぐにツルだとわかるのだが、その頃まだこちらではテレビは普及してなく、知らない人が多かったようである。

昭和57年2月だった。仕事で上対馬町の芦見に行っていた。車の中でラジオを聞いていたら、出水のツルが近いうちに飛び立つ準備をしているようだと言え、2、3日内に来ると心待ちにしていた。直行で韓国に渡ったのかすぐには来ず、27日午後6時ごろ、待ちに待った声をした。しかも時間も早く、鳥も見える時期である。子供を2人乗せて車で田の方に行くと、ツルは低く旋回しながらすぐ舞い降りた。この時が、私たち親子が見た初めてのツルであった。マナツルが10羽いた。親子で日が暮れるまで見て帰った。翌日

の朝は、まだ昨日の場所にいたが、午後5時半ごろ仕事から帰るときは飛び立って姿はなかった。

3月3日 マナヅル 14羽

3月8日～9日 ナベヅルだったろうか12羽いた

3月11日午後6時 ナベヅル30羽位が川の上空を鳴きながら飛んでいた

3月17日午後6時20分 ナベヅル13羽が田の中にいた

この年5回飛来したのだが、以前は人前に姿を見せなかっただけに不思議であった。以後、毎年5～8回飛来している。この春で人前に飛来しはじめて10年目になるが、まだ多くのツルは直行で韓国の方まで渡っているのが多い。毎年佐護上空を舞い、棹崎上空より韓国に渡っているのは多くなっているのではないだろうか。

人前に飛来するようになる以前には、全く降りてなかったかというところではなかったようである。部落の人の話では、海岸などに早く行けば、ツルが驚いて飛び立っていたということだ。これはツルが田に舞い降りをはじめて気付いたことだが、昔というか、食物が少なかったころには、鉄砲で取っていたという話を聞いたことがあった。それで人前に飛来しなかったのが、人間に保護給餌されるようになり、安全と思い飛来するようになったのではないかと思われる。人前に飛来しだして4～5年は、大きな声で鳴きながら上空を旋回し、1時間くらいは田には舞い降りることはなかった。そして、舞い降りてからもすぐに舞い上がり、部落上空をあの大きな声で鳴きながら夜中に旋回して回るのであった。

それが近年は変わった。飛来したときも鳴かずに、そのまま田に降りるし前までは旋回しながら地上を偵察しているのではないかと考えられたが、そ

れもしないときもある。ツルが飛来したときは、家の中においても鳴き声で群の大きさが分かったが、近頃は翌日見ないと気付かないことが多くなった。ツルが飛来したら知らせてくれと頼まれることがあるが、時間を気にしないツル達である。遠い所の人には飛行した後で観察できないときもある。毎年ツルの飛来数が出水では多くなっているようだが、これは日本が豊かな証拠であろう。まき餌なしには魚でもツルでも同じような気がする。

その春の使者も、もうまもなくやって来る。

HITOTSUBATAGO No. 8

ツユクサの桃色花の自生地

境 良朗

、1990年9月15日、アカハラダカの渡りの観察のため内山峠に赴いた。渡りが一段落した後、蝶類の調査のため豆酸まで足を伸ばすことにした。そこで、ピンク色の花をつけたツユクサを発見したので記録しておきたい。

〔自生地〕 巖原町豆酸 多久頭魂神社付近

自生地は、神社の右の農道を少し入った所のサツマイモ畑の片隅である。そこに、5㎡程度のツユクサの群落があり、普通花（青色）と混棲するように花をつけていた。普通花と桃色花の割合はおよそ7：3ぐらいであったろうか。國分先生によると、白花はあるが桃色花は見たことがなく珍しいということである。

数株を持ち帰り、栽培を岡部先生にお願いをしていたところ、順調に生育しているらしい。一応、写真に記録をとどめてきたが、形態的には青花と差はないようであるが、やや小ぶりの感じである。

（志多賀小）

新入会員です よろしく！

新入会員の皆さんに自己紹介をかねて一言書いていただきました。

植 貞幸

生年月日 1951年（昭和26年）6月4日 長崎市生れ

勤務校 大船越中学校

対馬にきて5年目になります。天文のほうを長く趣味としていましたが、もともと生物にも関心がありました。特に対馬に来てからは、対馬の生物をもっと知りたいという気持ちにかられていました。そんなとき、この会があることを聞き、仲間入りさせてもらったわけです。

研究会に入って、ランの無菌培養や探鳥会、白岳登山など経験させていただいてとても喜んでいきます。

私の生物関係の活動についていえば、上県町の一重中学校に勤務しているときは、しょっちゅう魚類の採集(?)に防波堤や磯まで出かけました。2kgのチヌを採集したときは、嬉しさのあまり近所中ふれ回りました。大船越中学校に来てからは、よい採集場に恵まれず、餌代ばかりかかって意気消沈しています。どなたか是非ご指導お願いします。

笹山 芳尚

今年、対馬にお世話になり1年になります。現在、大調中学校に勤務し、久根浜に住んでおります。この1年で思ってもみなか

った植物や動物たちとの出会いがありました。

夜道を車で走っているときツシマテンとであったり、立派な角をもったシカが車の前に立ちはだかった時など、つい大声をだしシカを驚かしたこともありました。その他にも、ヤツガシラとのであい、アマサギの群、アカハラダカの渡り、ホタルの乱舞、ハクウンキスゲの群落、ナツエビネの美しい姿。また、前から一度は見てみたいと思っていたダンギクが学校の裏の崖にたくさん咲いており、毎日見ることができたことなど・・・見るもの見るものが新鮮で、驚きと感動で、その場に立ち止まることが何度もありました。

この会での活動の中で、新たなであいによる感動を楽しみにしています。

水上 晴

はじめまして。私は昨年度、長崎北陽台高校から対馬高校に転動してまいりました。北陽台では、故江島正郎先生と一緒に勤務しておりましたので、昨年の訃報は残念なことではなりません。

ところで、対馬はまだまだ自然に恵まれ、生物を研究する者にとっては恰好のフィールドだと思うのですが、勉強不足の私には何を調べていけばよいのか暗中模索の状態です（ちなみに学生時代は海産無セキツイ動物、特にウニの発生の研究をやっていたので・・・部屋にこもるほうなのでしょうか）。でも、少しずつ指標生物を使って環境の評価でもしようかな・・・なんて考え始めています。

まだまだ何もわからない未熟者ですので、これからもどうぞよろ

しくご指導をお願いいたします。

秋田 出

この度、生物研究会の会員にいただきました秋田出です。
対馬にきて5年目になりますが、動植物のことについては、素人で何もわかりません。しかし、対馬にはまだまだ自然が残されており、珍しいものも多いと聞いております。入会を機にいろいろなものに触れてみたいとはりきっています。なにかとお世話になるとおもいますが、よろしくお願ひします。

(身体上の特徴)

なぜか若白髪が目立つ

特に冬は、不精髭を生やしていることが多い

八眉

眉間をがち割り3針ほど縫っている

高く美しい鼻



今村義治

私は昨年4月対馬に赴任して以来、対馬の自然を満喫しています。小さいときから野山の中で育ったせいか、草花や樹木、鳥を観察しながらの山歩きが大好きです。何かしら心が晴れ々するからです。

いつだったか浅茅湾に魚釣りに行き、そこから見た白岳に強く引かれ、いつか登ってみたいものだと思っていました。その矢先、生物研究会主催の白岳登山があることを知り、興味と期待を込めて参加させていただきました。白岳は思った通りの山で、深々とした樹林、力強い岩肌の大自然のすばらしさ、山頂のすがすがしさに大変感動しました。動物、草花については知りたいことばかりです。多くの友を得、広い視野を持ち、見聞を広めて、心豊かな人生を送りたいと思っています。今後ともよろしく願いたします。

出身地 鹿兒島県 勤務先 久原小 囲碁2級

長岡秀樹

昨年暮れの忘年会に参加し、皆さんのお話を伺い、様々な分野での研究を続けておいでとのこと、本当に感心させていただきました。

私など、ただ自然の生き物に少し興味があり、その姿や動きを自分の手元に記録してみようと思っている程度です。ただなかなか休みも自由にとれず、今までも頭の中で考えているだけで、実際に撮影できずに何年もたってしまった構想も幾つかあり、その都度悔やんでは「来年こそ！」と思っているばかりです。まあ焦ってもしょうがないとのんびり構えています。その中で今年になってようやく、以前使っていたラジコンのプロボ・サーボを利用し、ビデオカメラ

の遠隔操作ができるようにし野鳥などの自然の姿、しぐさなどを撮影できるように加工を始めました。うまくいくかどうかわかりませんが、色々試してみたいと思っています。これを機会に、色々御指導をよろしくお願いいたします。

HITOTSUBATAGO No. 8

1990年・小鹿小学校区の鳥類

谷口秀樹

1990年4月より対馬の地へ赴任して、もう10か月が過ぎようとしています。私は当地は大学生の頃よりやって来ていましたので、新しいという感じではなく、見慣れた所へやって来たという思いをもちました。しかし、勤務校の小鹿小は東海岸にあり、全く初めての土地でした。その点目新しい感じがありました。

始めて来たときには、巖原に上陸し、次の日に佐護へ向かいましたので、南部より北部のほうが自然が豊かだと気づいていましたが、初めての東海岸は本当に自然が豊かだと感じました。

三・四年担任ということもあり、この豊かな自然の様子を記録し、教材として使おうという考えが浮かびました。そこで始めたのが「小鹿小学校の鳥」の記録です。月によっては観察回数にばらつきがあります。これは、秋季以降は囀り（耳に頼ることが多い）が少なくなるためで、やや意欲が減退しました。本当は月により、調査回数を一定したほうがよいのですが、一つの試みとして見て頂きたいと思います。今後、調査回数で出現回数を割って

出現頻度を出してみようと思っています。

調査結果は、対馬の自然の豊かさをよく表していると思います。一つの校区内で（そのほとんどが学校の敷地内！）44種もの鳥が記録されることは、他の地域では、まず考えられないと思います。特に、5月に渡来して以来、28回も観察されたサンコウチョウは、他地域では多良岳や雲仙岳だけで、しかも数回しか記録のないような鳥です。ヤツガシラはやはり高山でしか見られないのが、当地では海岸近くに出現していますし、繁殖も確認しました。

今後は、この調査を皮きりにして、転動しても続けて、地域の比較をしてみたいと思っています。（調査記録Ⅰ・Ⅱ参照）

（小鹿小学校）

HITOTSUBATAGO No. 8

アカマダラコガネを採集

境 祐輔

アカマダラコガネを豊玉町で見つけたので報告します。このコガネムシは今まで対馬から記録がなかったそうです。豊玉小学校のベランダの所で見つけました。どこの産地でもあまり採集されず、めずらしいそうです。からだは茶色の地に黒い斑点たくさんがあります。みなさんも探して見てください。

〔記録〕 アカマダラコガネ 1頭

採集日 1990年5月

採集地 豊玉町仁位

採集者 境 祐輔

（豊玉小学校）

編集部註） 本種は対馬で発見されるとすれば、大陸系の亜種ではないかと期待されていたが、見る限り本土産亜種に該当すると思われる。

調査記録 I [出現回数 (日)]

No.	種名	調査回数(日)												
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1	センダイムシクイ	3												
2	ウグイス	2	14	17	12				3	2				
3	キセキレイ	1						3	2					
4	シジュウカラ	1	7	8	4			3	4	7				
5	ツツドリ	1	3											
6	オオルリ	2												
7	ヤマガラ		14	3	4			6	4	8				
8	サンコウチョウ		15	6	6	1								
9	ホトトギス		9	2										
10	カワラヒワ		10	5	2									
11	ハシロガラス		9	8	3			6	3	14				
12	ツバメ		13	5	1									
13	トビ		14	5	11	1	3	9	13					
14	ヒヨドリ		14	14	13	1	3	9	12					
15	カッコウ		3											
16	メジロ		13	8	8	1	2	7	9					
17	スズメ		10	5	4		2	7	3					
18	キジ		5	1	1									
19	コゲラ		7	1	2	1	1		2					
20	コシアカツバメ		2											
21	サンショウクイ		1											
22	サシバ													
23	イソヒヨドリ		2	2										
24	ヤブサメ		1	2										
25	コジュケイ		1			1								
26	オオヨシキリ		1											
27	ホオジロ			1	3					1				
28	モズ				1		2	7	5					
29	カケス				1			1						
30	キジバト				2			1						
31	シマセニユウ							1						
32	ウミネコ							1	1	4				
33	ジョウビタキ								10	9				
34	ハクセキレイ								2					
35	タヒバリ								6	8				
36	ハイタカ								2					
37	エナガ								1					
38	ミヤマガラス								1	1				
39	ミヤマ材カ									1				
40	ミソサザイ									10				
41	ピンズイ									2				
42	シロハラ									3				
43	シメ									1				
44	コサギ													

調査記録Ⅱ [出現頻度(%)] 出現回数/調査回数

No.	種名	調査回数(日)			出現頻度(%)								
		3	18	18	16	2	8	16	15				
	調査月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1	センダイムシクイ	100											
2	ウグイス	66											
3	キセキレイ	33											
4	シジュウカラ	33			25			25					
5	ツツドリ	33											
6	オオルリ	66											
7	ヤマガラ				25			25					
8	サコウチヨウ			33		50							
9	ホトトギス		50										
10	カワラヒワ												
11	ハシロガラス		50										
12	ツバメ												
13	トビ						50						
14	ヒヨドリ						50						
15	カッコウ												
16	メジロ						50	25					
17	スズメ				25		25		20				
18	キジ												
19	コゲラ						50						
20	コアサギ												
21	サシバ												
22	サシバ												
23	イソヒヨドリ												
24	ヤブサメ												
25	コジュケイ						50						
26	オオヨシキリ												
27	ホオジロ												
28	モズ							25		33			
29	カケス												
30	キジバト												
31	マセニョウ												
32	ウミネコ												
33	ジョウビタキ												
34	ハクセキレイ												
35	タヒバリ												
36	ハイタカ												
37	エナガ												
38	ミヤマガラス												
39	シマホトトギス												
40	ミソサザイ								66				
41	ビンズイ												
42	シロハラ												
43	シメ												
44	コサギ												

1990・迷蝶の記録

杉 憲・境 良朗

次の通り迷蝶を記録したので報告する。

(1) タテハモドキ (夏型) 2 e x s

○採集月日 1990・7・27

○採集地 下県郡巖原町豆酸

○採集者 杉 憲

○採集状況 当日は快晴微風、1頭は田の畦道にもう1頭は稲穂上に静止したものを採集。他には見られなかった。



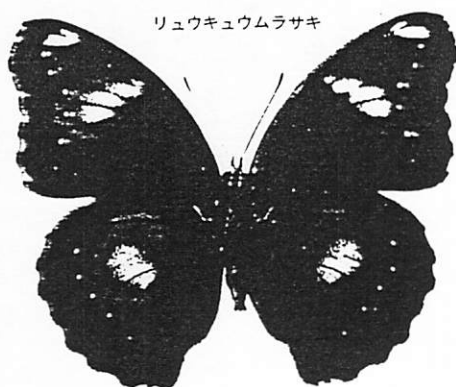
(2) リュウキュウムラサキ (台湾型) 1♂

○採集月日 1990・7・27

○採集地 下県郡巖原町豆酸

○採集者 境 良朗

○採集状況 さつまいも畑周辺の雑木に静止したものを採集した。



*当日は他にもウスイロコノマチョウ2頭を目撃した。

(3) メスアカムラサキ

○採集月日 1990・9・15

○採集地 下県郡巖原町豆酸3♀ ○採集者 境 良朗



山村会員 大活躍!

編集部

本会の山村辰美会員が朝日新聞社、全日本写真連盟共催の「読者の新聞写真コンクール」で県一に選ばれました。御覧になった方も多いたと思います。が、記載新聞のコピーを載せて、お知らせしたいと思います。

会員一同、心からお慶び申し上げます。今後のご活躍をお祈りするとともに、会のご指導の方も合わせてよろしくお願いいたします。

県一は対馬の山村さん



ツシマヤマネコ
19年も追い続け
山村さん

二十七歳の時、山で父親のシイタケ栽培を手伝っていて、木

のかげから飛び出したツシマヤマネコと初めて出合った。「何とか写真に」とカメラを求め、その姿を追いつけて十九年にな

夜行性の野生動物で、数は減る一方。生態を勉強し、撮影方法にも工夫を重ねた。偽装してのリモコン撮影も成功せず、えつけしたらえでのセンサー(感知器)撮影で、ようやくのちとえ



山村 辰美さん

ることが出来た。
県一の作品は、そんな苦労を重ねたらえて、冬場の夜中、山中で撮影したものだ。「うれい。苦労が実りました」。これまでに撮った数千枚のうち、モノになったのは二十枚足らずという。

環境庁は、激減のツシマヤマネコを「絶滅危惧(きん)種」に指定して、保護に乗り出した。県上東土佐駐在所に勤務する山村さんは、その保護策であるヤマネコへの給餌(じ)のため、山歩きを続ける日々だ。四十六歳。

朝日新聞社、全日本写真連盟共催の第三十六回(平成二年)「読者の新聞写真コンクール」で、県内では「靈仙噴火」の寺井邦久さんが種日本一に選ばれたのをはじめ、次の人たちが年

間賞に入賞した。
【県一】「ツシマヤマネコ」写真 山村辰美(対馬・上東町佐護院)
【努力賞】「アパート全焼」片岡友衛(全日本写真連盟員・長崎

市銭座町)、「尾が見えるレビ―すい星」松本直弥(佐世保市日野町)
【入選】「ブロック塀に激突した乗用車」野口静雄(西彼杵郡長与町三根郷)

対馬生物研究会会則

- 第一条 (名称) 本会是对馬生物研究会と称する。
- 第二条 (目的) 本会是对馬の生物の研究、観察、調査を通して自然への理解を深め、自然保護意識の高揚をはかり、その情報や知識の普及、会員相互の親睦をはかることを目的とする。
- 第三条 (活動) 本会は第二条の目的を達成するために、次の活動を行う。
- 1 対馬の生物の分布、生態に関する調査
 - 2 会誌「ヒトツバタゴ」連絡誌「ひとつばたご通信」の発行
 - 3 研修会、談話会の開催
 - 4 各専門分野の研究の促進、情報交換
 - 5 自然観察会の開催、指導
 - 6 自然保護育成への働きかけ
 - 7 写真展の開催
 - 8 その他
- 第四条 (組織) 本会は本会の目的および活動に賛同する者をもって組織し、年齢、職業等を一切問わない。
- 第五条 (会費) 会員は別に定める会費を納めるものとする。
- 第六条 (役員) 本会に次の役員を置く。
- 会長 1名 運営委員 若干名
- 役員は会員の中から、その任期が終了する前の総会において選出され、会の基本方針に従って会務を執行する。任期は3年とし、再任を妨げないが本人の意向を尊重する。
- 第七条 (会計年度) 会計年度は1月1日にはじまり12月31日に終わる。

- 付則
- 1 本会の運営費は会費および寄附金等による
 - 2 本会の年会費は1000円とする
 - 3 本会の事務局を次の場所に置く
上県郡上県町鹿見588 (09208-5-0832)
 - 4 本会則は昭和61年1月1日より施行する。

◎◎◎◎◎ 編集後記 ◎◎◎◎◎

本誌が届くころには、季節は弥生（3月）になっていることと
思います。

昨年度の最大のトピックは8名もの新入会員のみなさんを迎える
ことができたことです。プロフィールについては本誌に自己紹介、
論文を書いていただきましたので省略いたしますが、どの方も真摯
に自然を見つめ、自然と関わろうとする姿勢をもたれています。と
てもすばらしいことで、生物研究会にとっても力強い仲間を得て、
ますます活動が活発になるものと期待しています。どうぞ、よろし
くお願いします。

本号も会員のみなさんのご協力で充実したものとなりました。特
に佐伯、國分会員の《提言》は、会の目的でもある自然保護意識の
高揚という意味においても、今後ますます考えていかなければなら
ない課題といえそうです。みなさんの日頃考えておられることをど
しどしお寄せください。

編集を担当する者としては、論文はもちろん大歓迎なのですが、
会誌をより親しみのある、気楽で楽しい読み物にしたいと思ってい
ます。紀行文、エッセイ、初心者向け講座、生き物紹介、提言、詩
質問箱、近況報告、観察メモなど何でも結構です。お待ちしております。
みなさんの今年の成果を期待して・・・・。（S）

*
* **トツバコ** NO. 8 *
* 対馬生物研究会誌 *
* *
* 発行所 対馬生物研究会 *
* 長崎県上県郡上県町鹿見588 *
* ☎09208-5-0832(麩) *
* *
* 発行日 1991年2月28日 *
* *
* 編集 境 良 朗 *
* *

目

次

○イシガケチョウの飼育記録	杉 憲	1~ 7
○対馬のゲンカイツツジと品種	岡部虎男	8~15
●スジグロシロチョウの記録	境 良朗	15
○ウリ科植物の利用	浦田明夫	16~21
○対馬の鳥類調査	浦田明夫	22~25
●セミの初鳴日	境 良朗	25
○「提言」オウゴンオニユリについて	國分英俊	26~27
●「提言」ツシマジカ	國分英俊	27
○「提言」自然に親しむ子供を育てよう	佐伯正發	28~29
○イワウメツル発見	永留 浩	30~31
○対馬産アゲハモドキの翅脈について	境 良朗	31~32
●キンオニクワガタの一産地	境 良朗	32
○1990・イシガケチョウ目撃記録	杉 憲	33~34
○甲虫とカメムシの記録	境 祐輔	35~36
●ツシマウラボシシジミの新産地	境 良朗	36
○蝶類4種の交尾飛翔記録	境 良朗	37
○北帰行(ツル)	山村辰美	38~40
●ツクサの桃色花の自生地	境 良朗	40
○新入会員です よろしく!	新入会員	41~45
○1990年・小鹿小学校区の鳥類	谷口秀樹	45~48
●アカマダラコガネを採集	境 祐輔	46
○1990・迷蝶の記録	杉 憲 境 良朗	49
○「トピックス」山村会員大活躍!	編集部	50
●対馬生物研究会会則	編集部	51
●編集後記	編集部	